

- 立科小学校/午前9時～午前11時30分  
電話 56-3131(呼)・有線2190(呼)
- 立科中学校/午後2時～午後5時  
電話 56-1076(呼)・有線2251(呼)
- 立科町児童館/  
午前 11時40分～午後1時30分  
電話 56-0303(直通)  
有線 8889(直通)

※予約をされる方は児童館または小・中学校の  
教頭先生へご連絡をお願いします。

## 成長期に応じた若者の頼もしさ ～「大学生の感想文」と 「高校生の合唱」に接して～

立科町教育相談員 岩上起美男

今冬、厳しい冷え込みが続いた大寒のころ、多くの保健体育科教諭やスポーツ指導者を輩出している某女子大学のA教授から、分厚い封筒が届きました。

その数日前、A教授から電話をいただいておりましたので、角形2号の大型封筒の中に、卒業を間近に控えた大学4年生の感想文が入っていることは承知していました。

A教授が、電話で次のように話されました。

「広報たてしな」の「シリーズ一緒に考えましょう!」を、本年度の最終講義「教職実践演習」の教材として使わせていただきました。

平成24年12月の「嬉しいもの、懐かしいものとして、いつまでも心に残る褒められた思い出」と、平成25年3月の「励みと元気を分け与えていただいた嬉しいお便り」です。

この二つの提言を、「教職実践演習」の教材として取り上げたのは、今春4月から、保健体育科教師として学校教育や、インストラクターとしてスポーツ指導に携わる卒業生に、児童・生徒の長所と頑張りを細やかに見とり、きちんと評価したり、褒めたりすることの大切さを伝えたいからです。

本学の学生の多くは、運動選手として

優れた競技実績を残しています。大学日本一に輝いた学生もいます。試合で勝つために、小・中学生のころから、部活動や社会体育などにおいて、ハードな練習を重ねてきたからです。当然、指導者の姿勢によって大きく異なりますが、時には人格さえ否定するような怒声や罵声を浴びる勝利至上の練習に耐え、競技力を向上させてきたのです。

私は、このようなスポーツ体験を通して、前途有望な大学生の心と体に染み込んだ悪しきスポーツ指導の連鎖を断ち切ることを、大学教員としての自分の大きな課題と考えています。

近年、スポーツの場における指導者の体罰が社会問題になっていきます。そこには、一指導者だけの問題ではない、数々の根深い要因や背景が絡み合っています。が、歪んだスポーツ指導を再生産しないためには、何よりも指導者となる大学生の意識改革が不可欠です。

「教職実践演習」では、「教師になったとき、何が最も大事か」をテーマに、二つの教材を読み合って、ディスカッションし、感想をA4判1枚にまとめました。学生が、この演習に意欲的に取り組み、教材の内容もしっかりと受け止めていました。練習や試合で叱咤され続けてきた大学生にとって、非常に新鮮で、インパクトの強い提言であったようです。

感想文も何時になく(?)、きちんと書きましたので、担当ゼミの学生全員のコピーをお送りします。

A教授のお話に、面映ゆい思いを抱きながらも、老生なりに、「人は誰も、自分の存在や行為の意味を自覚したい存在である。」という欲求が充足されたような手応えを感じ、大学生54名の感想文に興味深く、一気に読み通しました。

そして、山深い谷間で、山彦が返ってくることをさほど期待しないで発した「ヤッホー!」という叫び声が、かすかに、しかし、確かに木霊しているのを聴いたような嬉しい驚きを覚えました。大学生一人一人の感想文に、提言を素直に受容し、自分自身の「正」と「負」の体験を振り返りながら、自分なりに濾過した教訓を自分の実践に自分らしく生かしていこう、という決意が、丁寧な文字で書き綴られていたのです。

大学生の、このような「若者らしさ」を非常に頼もしく思い、一読後、まことに謙虚な心持ちで、「傲らず、大学生の飾りのない文章表現や書くことに対する真面目さ、瑞々しい感受性に学ぼう。」と自戒したことです。

一人の学生の感想文を紹介致します。「古い世代は、若い世代に伝えるべき経